

実践研究報告書要旨

学習者のエンパワーメントを引き出すための授業開発 ～連峰型スポーツモデルを意識した高等学校における保健体育授業を通して～

峯 勇太（授業実践探究コース）

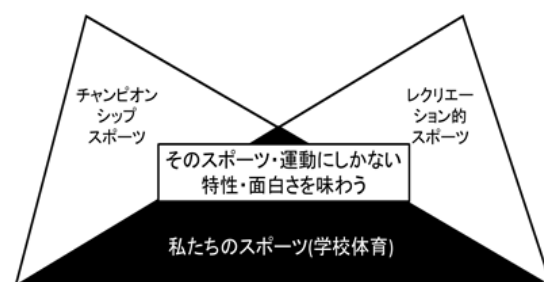
【1. 研究の背景・目的】

文部科学省(2009)の高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編においては、保健体育の教科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる。」とされている。また、高等学校は普通教育の最終段階であり、「明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる」を究極の目標としている。文部科学省のスポーツ基本計画(2017)においても、具体的施策として、「国は、体育・保健体育の学習指導要領の改訂において、体力や技能の程度、生涯の有無及び性別・年齢にかかわらず、スポーツの多様な楽しみ方を社会で実践できるよう、指導の改善を図ることにより、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成を図る。」としている。現状、高校生は高等学校を卒業後、大学進学・専門学校への進学や就職が主な進路である。卒業後の実生活・実社会において、身に付けた資質・能力を活かさなければならないことを考えると、「体育」の担う役割を考えていかなければならないだろう。

そこで、学校体育とは国民のスポーツライフのどの部分を担う存在であるのだろうか。本研究では、日本のスポーツモデルの理想を梅澤(2016)の示す「連峰型スポーツモデル」とし、その基盤である学校体育の役割を担うために、学習者のエンパワーメントを引き出し、高等学校保健体育で生徒の身に付けるべき資質・能力を高めることを目的とする。

【2. 理論】

まず、「連峰型スポーツモデル」について示す。梅澤(2016)は、「チャンピオンシップスポーツ(競技志向)とレクリエーション的スポーツ(健康志向)の連峰のいずれにも向かう重なり部分が学校体育だと考えられます。」と述べている(図1)。要するに、競技を行う者も、健康づくりを行う者の両者にとっての基盤となるのが学校体育の役割であると考えられることができる。



次に「エンパワーメント」について示す。「エンパワーメント」とは、森田(1998)は、「わたしたち一人ひとりが誰でも潜在的にもっているパワーや個性をふたたび生き生きと息吹かせること」と示している。この定義を踏まえ、様々な分野で定義がなされているが、本研究では文部科学省(2009)の高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編の保健体育の教科の目標と重ね合わせ、高等学校保健体育におけるエンパワーメントを「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力」と定義する。

【3. 授業実践】

1. 授業実践の概要

本研究では、生徒のエンパワーメントを引き出す授業開発を行った。「教師のエンパワーメント」に関する研究は多くみられる一方、学習者に対する研究はあまりみることができない。そこで、エンパワーメントの研究が多く行われている老年看護学の研究に着目した。高齢者が健康づくり、生きがいづくりなどの地域活動へ参加することにより、意識や考えがどのように変化したのかをエンパワーメント尺度を用いた百瀬(2007)の研究を主に参考とした。高齢者が健康づくり、生きがいづくりなどの地域活動へ参加することを、生徒が体育の授業に参加することと照らし合わせ研究を進めることとした。本研究の授業におけるエンパワーメントを引き出す手立てとしては、百瀬(2014)の述べる看護職に求められる5つの支援を体育の授業に置き換え援用した。①メンバー同士が互いに仲間を認め合い尊重できるように➡様々な人との関わり合いがもつことのできるグループ活動を取り入れる。②グループの目標が明確にもてるように活動全体の目標(めあて)を明確にする。③成果がフィードバックされるように➡形成的評価の学習ノートへ教師側からのコメント。④意思決定にメンバーが参加できるように➡学習ノートにおける生徒の要望欄を作る。⑤活動の場の提供、居心地のよい環境づくり➡IVを踏まえ、チームのすべての生徒が意見交換を行いやすいような雰囲気づくりを行う。さらに、スポーツへの関わり方(する・みる・支える)を意識させるため、小規模スポーツ大会を開催し、生涯スポーツへの意識を高める手立てとした。

2. 方法

S県S高等学校第2学年(15名)、授業時間数全4時間、選択球技(テニス)選択者を対象とした。15名の内訳は、男子1名、女子14名である。また、運動経験者7名、非運動経験者が8名である。以下のデータを記録した。(1)生徒のめあて、それに対する振り返り、要望、教師側からのコメントを記入した学習カード。(2)学習者のエンパワーメント尺度、生涯スポーツに対する意識調査、運動に対する意識調査を含むアンケート(授業前後)。(3)非運動経験者3名へのインタビュー調査。エンパワーメント尺度については、百瀬(2007)の分析方法を参考とし、分類した。合計点12項目、第1因子『自己の可能性に対する気づき』6項目(F1)、第2因子『相互作用による問題の意識化』3項目(F2)、第3因子『積極的行動の志向』3項目(F3)である。生涯スポーツに対する意識調査は3項目、運動に対する意識調査は5項目とした。

3. 結果及び考察

(1)エンパワーメント尺度・生涯スポーツに対する意識調査・運動に対する意識調査

本研究の結果(表1)より、百瀬(2007)の尺度の援用によるエンパワーメント尺度の結果としては差異としてみることはできなかった。これは、元々の平均値が高いことも影響していることも考えられる。非運動経験者は本研究で定義した保健体育の授業にお

表1 各項目のt検定(n=15)

		授業前	授業後	t値	p値
エン パ ワ ー メ ン ト	合計点	21.06	21.60	.855	.407
	F1(自己の可能性)	10.40	10.66	.654	.524
	F2(相互作用)	5.06	5.26	1.00	.334
	F3(積極的行動の志向)	5.60	5.66	.367	.719
生涯スポーツ		4.73	4.86	.695	.499
運動意識		8.26	8.40	.619	.546

ける学習者のエンパワーメントである「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力」が運動経験者よりも低いと仮定したためである。しかしながら、今回の結果では、半数を非運動経験者が占める授業においても、元々のエンパワーメントの値が高いも

のを示した。生涯スポーツに対する意識調査・運動に対する意識調査においても同様と考える。また本研究では、アンケートにおいて2件法を用いたが、生徒のエンパワーメントをより詳細に測るためにも選択肢を増やした調査を行う必要があると考える。先行研究として百瀬(2007)の尺度を援用したが、本研究においては、尺度の援用の行い方などを更に考慮していく必要があるだろう。

(2) 非運動経験者の結果

非運動経験者($n=8$)を抽出し、 t 検定を行った。エンパワーメント尺度の第2因子「相互作用による問題の意識化」(3項目)において有意な傾向がみられた($t=2.049, p<.10$)。本研究での学習者のエンパワーメントを引き出す手立てⅠで示す、「メンバー同士が互いに仲間を認め合い尊重できるように➡様々な人との関わり合いがもつことのできるグループ活動を取り入れる。」が大きく関与しているのではないかと考える。従来の授業としては、チームのメンバー等は、クラスなどで仲の良いメンバーでの形成であった。しかしながら、今回は所属するクラスを関係なく運動経験者と非運動経験をバランスよく配置した。また、Ⅴで示す「活動の場の提供、居心地のよい環境づくり➡Ⅳを踏まえ、チームのすべての生徒が意見交換を行いやすいような雰囲気づくりを行う。」というものを踏まえ、技術等を教師側からのみの指導に限らず、生徒間同士で教え合う雰囲気ができた。小規模スポーツ大会においても、全員が協力しなければ大会運営が成り立たないため、生徒の協働的な活動がみられた。以上の二点を踏まえ、有意な傾向がみられたのではないかと考える。

(3) 授業後のエンパワーメント合計点と授業後の生涯スポーツに対しての意識調査の関係性

エンパワーメント合計点と生涯スポーツに対しての意識調査の関係性を回帰分析により調査したところ、有意な差がみられた($\beta=.51, p<.05$)。保健体育の授業における学習者のエンパワーメントを「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力」と、定義し研究を進めた。エンパワーメント合計点と生涯スポーツに対しての意識がより関係性が高いことが認められたことは、本研究の大きな成果と言える。エンパワーメントを引き出すために行った5つの手立ての有効性を明らかにすることのできる結果といえるだろう。

(4) インタビュー調査

インタビュー調査では尺度で読み取ることのできない生徒の意見や考えを抽出することができた。エンパワーメントを引き出す5つの手立てについても、それぞれの手立てを生徒が肯定的に感じ取っていることがわかる。手立て①・⑤に関しては、従来の授業とはメンバー構成を変えたことについて発言がされている。クラスの枠を越え、様々な人との関わりを持つことができたようである。体育の授業のみならず、現在の生徒同士のコミュニケーションツールである SNS でのつながりがもてたようである。また、非運動経験者にとっては、運動経験者と多く接することにより、自身が認められているという意識もあったようだ。しかしながら、依然として他のクラスの生徒がどのように思っているのかを気にする姿勢もある。メンバー構成が従来と異なったことは生徒には好印象であったと考える。手立て②・③に関しては、今回は学習ノートを使用した。授業の見通しが持てたことに関しては、従来の授業と異なる部分であり、肯定的な意見を得ることができた。また、教師側からのコメントについても、より活動に積極的に参加する動機になったことが伺える。④の要望欄についての発言はあまり得られなかったものの、ソフトテニスボールでの授業は、ソフトテニスボールでよかったという意見と共に、硬式テニスのボールでも頑張ったかったという意見があった。生徒の意見を直接取り入れることができるという点では効果的な方法であったと考える。次に、生涯スポーツについての発言である。スポーツへの関わり方(する・みる・支える)を意識させ、小規模スポーツ大会を開催したことで、支えるということに生徒は意識が強くあったと読み取れる。大会の運営を行わせる中で、またチ

ームとして団結して勝つために応援をすることなどを意識できていたようである。また、今後のスポーツライフについても、肯定的な意見を得ることができた。その中で、新たな意見が得られた。「スポーツ」という言葉に非運動経験者は苦手意識を持ち、「運動」という言葉であると今後も行いたいと肯定的な意見を持つことができるということである。教師の使う言葉等で活動の印象が変化する可能性があるだろう。高等学校保健体育において、多くの単元は「スポーツ」の種目を行う。スポーツ種目を授業で行うことが生徒にとっての負担でもあり、苦手意識につながる可能性があると考えられる。

【4. 研究の成果及び今後の課題】

成果としては、非運動経験者を抽出し、エンパワメント尺度の第2因子「相互作用による問題の意識化」において有意な傾向がみられたこと、授業後のエンパワメント合計点と授業後の生涯スポーツに対しての意識調査の関係性に有意な差が認められたこと、インタビュー調査より生徒にエンパワメントの手立てについてや生涯スポーツについての肯定的な意見を得ることができたことは成果といえる。インタビュー調査による結果では、学習者が本研究の体育の授業に対しての肯定的な意見を得られたばかりでなく、非運動経験者が「スポーツ」という言葉に対しての苦手意識を持つという新たな発見が得られた。各調査項目より、エンパワメントの定義の設定と百瀬(2007)の手立ての援用が合致していたと考えられる。非運動経験者の生徒がこれからのスポーツライフに目を向け、肯定的に捉えていることが本研究の大きな成果といえるだろう。

課題としては、まず一つ目にエンパワメント尺度の再作成とそれに合致した手立ての再構成である。インタビュー調査より、生徒から多くの肯定的意見を得ることができているにも関わらず、検定結果として差異を認めることができなかったものがあるため、尺度の改善等が求められるだろう。また、当初は全10時間程の予定で計画を行っていた。高等学校との調整の結果、時間数の減少は防ぐことができなかった。そのため、更に時間数を増加させた場合の生徒の変化を見取ることも必要となってくるだろう。二つ目に、生涯スポーツの見取りである。本研究では、授業前後の調査のみである。しかしながら、卒業後の実生活・実社会で生徒が運動と親しむ機会が得られているのか縦断的調査を行う必要があると考える。また、インタビュー調査より運動・スポーツの環境についての意見も見ることができたため、日本・地域のスポーツを行う環境を踏まえ研究を行う必要があると考える。

「連峰型スポーツモデル」の基盤となる学校体育の役割を追求していきたい。三つ目に、学習者のエンパワメントを引き出す手立ての他教科・教育活動全体への活用方法である。各校種・各教科等のエンパワメントの定義を授業者が定め、手立てを有効活用することができるとよいと考える。

【主要引用参考文献】

- ・梅澤秋久(2016)体育における「学び合い」の理論と実践.大修館書店:10-28
- ・百瀬由美子(2007)高齢者のヘルスプロモーションにおけるエンパワメント尺度の開発.身体教育医学研究 8:21-32
- ・百瀬由美子(2014)高齢者が主体的に生きることを支える老年看護学の探究,老年看護学 191:5-10
- ・森田ゆり(1998)エンパワメントと人権-こころの力のみなもとへ-.解放出版社.p17
- ・文部科学省(2009)高等学校学習指導要領解説保健編・体育編,東山書房:11-16
- ・文部科学省(2017)スポーツ基本計画. http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/_a_menu/sports/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf